

父親の家事・育児意識と行動の変容とその要因に関する研究 ——2000年と2011年のデータ比較を通して——

寺見 陽子¹⁾・南 憲治²⁾

¹⁾ 神戸松蔭女子学院大学人間科学部

²⁾ 京都橘大学人間発達学部

Author's E-mail Address: y-terami@shoin.ac.jp

A Study on the Change of Fathers' Consciousness and Practices of Child-rearing, and the Factors of these Change —comparing with 2000 and 2011 data—

TERAMI Yoko¹⁾, MINAMI Kenji²⁾

¹⁾ Faculty of Human Science, Kobe-shoin University

²⁾ Faculty of Human Development, Kyoto Tachibana University

Abstract

本研究は、今日の父親の育児意識・行動の変化と、その変化を規定する要因について、父親の内的特性との関連を検討し、父親の育児参画と養育性、親役割アイデンティティの形成を促し支援の視点について論議することを目的とした。

研究Ⅰでは、方法は、2000年と2011年に、父親・母親107組を対象にアンケート調査を行い、育児意識と行動の変化について検討した。その結果、父親の家事・育児意識と参加度の自己評価は、11年前に比べ高まっていた。母親の父親も評価高かったが、11年前に比べ低下していた。

研究Ⅱでは、研究Ⅰにおける2011年の被験者を対象に、父親の養育経験、不安・愛着に関する質問項目を津付加して調査し、今日の父親の育児意識・行動を規定する要因について検討した。しその結果、父親の親との親密性、父親の父親との良好な関係、子ども時代の熱中経験、父親自身の受容的愛着と関連していた。これらの結果をもとに、育児における父親参画の在り方と養育性支援の視点について検討した。

The purpose of this study was to discuss about perspectives of the support in fathers' child-rearing, comparing the fathers' consciousness and daily practices of household and child-rearing with presence and eleven years ago. Furthermore we analyzed on relationships with father's inner factors of their changes.

The method was to use the face-sheet. We gathered the data from 107 father and mother dyads in 2011, and 137 dyads in 2000. The data suggested that fathers' believes of their roles on household and child-rearing changed from traditional thought to new perspectives. Participation of daily practices increased than eleven years ago. Their wives evaluated them as he father and as husband. The father's practices were related with their experiences in childhood of intimacy of parents, good relationships with father's father and exploring interested things in childhood, also related with father's attachment.

Based on these consequences, we discussed about how to develop the fathers' nurturance and social support.

キーワード：育児意識・行動の変化、家事・育児参画、規定要因、成育経験、愛着

Key Words: Change of consciousness and behavior in child-rearing, factorial analysis,

Involvements of household and child-rearing, Attachment, Experiences in childhood

問題の所在

今日の核家族化・少子化に伴う育児に関する課題は、いま、父親の育児への参画とワークライフバランスに注目が集まっている。「イクメンプロジェクト」を契機に、父親の育児参画の必要性は、社会的に周知されるようになってきた。しかし、現実生活において、どこまで浸透しているかについては、まだ十分な調査結果が得られていない。父親が育児にあまりかかわらない歴史的な経緯をもつ日本（欧米でも背景は異なるが同じ歴史がある）では、その在り方も方法も、モデルなき試練があると言わざるを得ない。

父親の育児に関する調査や研究は十分なされていないというものの、いくつかの興味深い研究結果がある。

Robinson & Barret (1986) によると、父親としての意識の芽生えは妻の妊娠がしたときに生じるという。しかし、父親としての子どもへの愛着の形成は、実際に子どもとかわることができるようになって得られ（原田 1984）、感情的な側面での父親意識は、言葉が出たり歩き始めたりして、はじめて我が子の成長を実感するようになって促される（岡野ら、2006）。また、家事・育児への参画は、父親としての子どもとの親和性や親としての自律性を獲得する必要であるとされる（Grossmann et al, 1988）。そうした自律性を獲得する過程で、父親も子どもとの愛着を形成していくからである。したがって、その過程は、母親が子どもとの愛着を形成する過程と同様の経過を辿り（Chibucos & Kail, 1981）、その質は母親と差異がないことが明らかにされている（Cox et al, 1992）。

では、父親の関わりは、子どもの発達にどのような影響を与えるのだろうか。Baumrind & Black (1967) によると、父親のかかわりは子どもの自立性の獲得に影響し、ことに父親との

遊びが子どもの社会的行動に影響するとされる (Kotelchuk, 1976; Pedersen & Robinson, 1969; Zelazo et al, 1977)。また、この期の父親との愛着関係は、その後の児童期、青年期の友人関係の発達に影響を与える (Lieberman et al. 1999) とともに父親も、この期の子どもとの関係を通して、父としての親和性や自律性を獲得し、父になる実感や心の準備、自信、父になることへの肯定的な態度が形成されるという (小野寺ら、1998)。事実、柏木・若松 (1994) の研究では、育児に参加した父親ほど人間的に成長したと感じており、父親の育児参加は自身の養育性の獲得に重要であることを指摘している。

多賀 (2006) は、1980年代以後、父親は家庭の大黒柱としての「権威的な父親」から子どもを養育する「ケアラーとしての父親」という新しい文化的イメージが生まれたという。しかし、その「ケアラーとしての父親」に関して、例えば、父親の子育てへの関与やそれに伴う意識の変化、父親としての養育性の獲得等に関連した研究は、まださほど多く行われていない。これまでの研究では、父親の存在意義や子どもの発達への影響に関する研究 (Pedersen, 1980; Lam & Sagi, 1983; Easterbrooks & Goldberg, 1984; Cohen et al. 1984; Berman & Pedersen, 1987)、父親の家事・育児意識や参加度の変化に関する調査研究 (内閣府、2005; 松田、2006a, 2006b; 斧出、2003)、その参加を規定する要因及び父親になるプロセスや父親としての成長に関する研究 (柏木・若松、1994)、夫婦関係や家族関係と育児協力及びその評価に関する研究 (Crockenberg, 1981; 牧野・中野, 1985; Belsky, et al. 1995; 諏訪ら, 1997; 原ら、1998) や父親の関与と母親の養育行動 (Engfer, 1988; Mash et al. 1983; 尾形・宮下, 2003) に関する研究などが見られる。これらの研究の結果では、父親の育児意識は変化してきているが、行動はあまり変化しておらず、その要因としては、いまだ社会が父親は働き手 (家計) の中心であり、労働時間が長く、家事や育児に参画する時間的ゆとりがないことや育児休暇が取りにくいことなどを指摘している。また、父親の育児への参画は、末子の年齢や母親の就労時間が関連するも明らかにされている (松田、2006b)。

このように、父親の研究は、社会機能面や環境上の要因等、その道具的側面での変化に関するものが中心である。おそらく、それは、父親は母親のサポート源としての役割が大きいためであろう。

しかしながら、すでに述べたように、父親も養育者として子どもとの関わりを通して、養育者としての資質や機能、子どもとの愛着関係や父親としての親和性・自律性を獲得していくのであれば、父親の自信の持つ背景や特性との関連を検討する必要があるだろう。

母親の愛着研究ですでに明らかにされている事実が、父親にも相当するのであれば、父親の成育過程での父親自身の親との関係や子どもとのかかわりの経験が、家事・育児参加と関連しているであろうことが予測される。育児参加の多い父親は、自らの父親が暖かく、養護的であること (Sagi, A., 1982) や、父親自身の幼少期の体験や自分の父親の存在、自分の父親との関わり方の経験が、家事・育児行動に影響し、自分の子どもとの関わり方の頻度の高さと関連している (田辺、2010) という研究結果も報告されている。

そこで、本研究では、今日の父親の育児意識と育参加育児行動の変化とその背景を探ることを研究の目的とした。

研究 I

1. 研究 I の目的

今日の父親がどのような育児意識をもち、実際どの程度育児行動をし、それをどう評価しているかについて、母親の父親評価を踏まえて明らかにするとともに、2000年のデータとの比較を行い、その変容について明らかにする。

2. 方法

(1) 対象

2000年にH県I市立保育所に在籍していた子どもの親135組(K)と2011年にH県I市立保育所に在籍していた子どもの親107組(F)。条件を統制するために、2000年、2011年ともに、同じ地域の同じ条件の園の保護者を対象とした。

本研究の参加した父親と母親の年齢構成は表1のとおりである。平均年齢は、父親はK37.29歳、F35.54歳、母親はK34.60歳、F34.10歳であった。また、子ども数とその年齢構成は表2のとおりであった。祖父母との同居は少なく、9割が核家族であった。

(2) 調査方法

アンケート法によった。アンケートの実施に際しては、事前に施設長、担任に精査して頂き、その後、施設長より園だよりを通じて、アンケートの趣旨と目的、自由意思であり強制ではないこと、記入したものは各自で返信等の封筒で返送するので個人が特定されないこと、回答も統計処理され個人が特定されないことを説明して頂いた。また、降園時にも口頭で説明の機会を持ってもらった。さらに、アンケート用紙にも同様の内容を記載し、統計的な処理に用い個人が特定されないことを周知し、倫理に配慮した。

アンケートは、父親用と母親用を1セットにして200組用意し、施設長から担任を通じて配布、後日、郵送にて回収した。2000年の回収率は53.5%、2011年は59.4%であった。2000年の調査は、2000年6月～7月、2011年の調査は、2011年7月～8月に行われた。

(3) 調査内容

アンケート項目は、柏木(1993)、福丸(1999)、子ども未来財団(1998)の項目を参考に、個人の属性と「家庭と仕事について」、「家事について」、「育児について」「役割について」「結婚について」の項目で構成され、父親は全35項目、母親は全27項目が用意された。

父親の属性については、「年齢」、「家族数」、「子ども数」、「職業」、「労働時間」、「帰宅時間」、「配偶者の年齢」、「配偶者の就労と職種」、「配偶者の職歴」を尋ねた。

また、「家庭と仕事について」は、「男は仕事、女は家事」「家事・育児は女性の果たす役割という考え」について、また、「家事について」は、「仕事と家庭のウエイト」、「男性(夫)の家事協力」「実際の家事参加度」「家事参加する(しない)理由」について尋ねた。

「育児について」は、「家庭での父親・母親の役割意識」「平日・休日の子どもと関わり時間」「入浴・おむつ交換・授乳(食事)・衣服の着替え・寝かしつけ・ぐずりの世話・一緒に遊び・絵本読み・いろいろなことを教える・疑問に答える・園への送迎等の実際」「育児をしようと思う理由(複数回答)」「育児に対する考え」「育児が出来ない(しない)理由(複数回答)」「育

表1 父親・母親の年齢構成（人）

| 年 齢 | 父 親 | | 母 親 | |
|-----------|------|------|------|------|
| | K | F | K | F |
| 21 歳～24 歳 | 1 | 2 | 1 | 3 |
| 25 歳～30 歳 | 8 | 12 | 17 | 16 |
| 31 歳～35 歳 | 43 | 40 | 64 | 43 |
| 36 歳～40 歳 | 53 | 40 | 36 | 32 |
| 41 歳～45 歳 | 17 | 10 | 14 | 12 |
| 46 歳～50 歳 | 12 | 3 | 3 | 1 |
| 50 歳以上 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 平均 | 37.3 | 35.5 | 34.6 | 34.1 |

表2 子どもの年齢構成（人）

| 年 齢 | 一 子 | | 二 子 | | 三 子 | | 以上 |
|-----------|-----|----|-----|----|-----|---|----|
| | K | F | K | F | K | F | K |
| 0 歳～3 歳 | 25 | 40 | 54 | 38 | 22 | 6 | 1 |
| 4 歳～6 歳 | 69 | 50 | 44 | 21 | 2 | 5 | 4 |
| 7 歳～9 歳 | 21 | 21 | 3 | 2 | 2 | 0 | 1 |
| 10 歳～12 歳 | 20 | 4 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 13 歳～15 歳 | 6 | 1 | 2 | 2 | 1 | 0 | 0 |
| 16 歳以上 | 4 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 男 | 70 | 57 | 50 | 36 | 19 | 8 | 3 |
| 女 | 65 | 49 | 56 | 25 | 9 | 2 | 3 |

児休暇の取り方」等について尋ねた。

「自己評価について」は、父親としての役割の自己評価、夫としての役割の自己評価、を4段階評定してもらった。母親にも父親と同様の質問紙を配布し、母親自身の意識を尋ねるとともに母親の父親評価の回答を求めた。

3. 結果

(1) 就労と労働時間

就労については、会社員（K81%：F53%）と公務員（K14%：F17%）が全体の8割以上を占めていた（表3-1）。また、母親は常勤職の人が2000年より増加していた（K：29.1%、F：61.7%）（表3-2）。しかし労働時間は、父親の場合（K：11.1時間、F：11.2時間）差は見られなかった。

表 3-1 父親の職種 (人)

| 項目 | K | F |
|------|----|----|
| 会社員 | 87 | 72 |
| 公務員 | 15 | 23 |
| 教職関係 | 6 | 1 |
| 自営業 | 15 | 7 |
| 自由業 | 3 | 2 |
| その他 | 9 | 1 |

表 3-2 母親の就労形態 (人)

| 項目 | K | F |
|-----|----|----|
| 常勤 | 38 | 66 |
| パート | 13 | 28 |
| 自営業 | 6 | 2 |
| 内職 | 0 | 1 |
| その他 | 3 | 4 |
| 無回答 | 75 | 6 |

(2) 仕事と家庭について

仕事と家庭の優先順位は、「仕事優先」が有意に減少していた ($\chi^2=11.78$, $df=1$, $P<.01$)。また、「男は仕事・女は家庭」の考えは、「同感しない」が有意に増加していた ($\chi^2=17.66$, $df=1$, $P<.01$)。さらに、「家事・育児は女性の役割」についても、父親、母親ともに、「思わない」人が有意に増えていた (父親: $\chi^2=109.05$, $df=1$, $P<.01$ 、母親: $\chi^2=109.05$, $df=1$, $P<.01$)。

(3) 父親の家事・育児への参加について

1) 父親の家事参加

「父親 (夫) が家事に協力するのは当然だ」と考える人が有意に増加していた ($\chi^2=65.37$, $df=1$, $P<.01$)。また、実際の家事行動では、「洗濯する」 ($\chi^2=17.38$, $df=1$, $P<.01$) 「掃除する」 ($\chi^2=5.74$, $df=1$, $P<.05$) 「料理・食事の支度をする」 ($\chi^2=4.60$, $df=1$, $P<.05$) 「食事の後片づけをする」 ($\chi^2=8.58$, $df=1$, $P<.01$) 「ゴミ出しをする」 ($\chi^2=12.56$, $df=1$, $P<.01$) 「洗濯物や取り入れやアイロンがけをする」 ($\chi^2=14.57$, $df=1$, $P<.01$) の項目で増加し、「食料や日用品などの買い物をする」「衣服の準備・整理をする」「布団の上げ下ろしをする」の項目では有意な差はなかった。母親の父親評価も、K・Fともに父親と同じように評価しており、父親の家事・育児の進行が確認された。「家事に参加できない理由」は、K・F共に「仕事で家事をする時間がない」が最も多かった。

2) 父親の育児参加

「父親 (男性) が育児をするのは当然である」という質問に対して、「そう思う」人が有意に増加していた ($\chi^2=76.99$, $df=1$, $P<.01$)。さらに、「普段、育児にどの程度関わっているか、もしくは関わったか」については、「おむつを替える」 ($\chi^2=18.34$, $df=1$, $P<.01$) 「食事 (授乳) をする」 ($\chi^2=3.92$, $df=1$, $P<.05$) 「衣服の着替えをする」 ($\chi^2=18.73$, $df=1$, $P<.01$) 「寝かしつける」 ($\chi^2=7.08$, $df=1$, $P<.01$) 「ぐずった時に世話をする」 ($\chi^2=16.71$, $df=1$, $P<.01$) 「一緒に遊ぶ」 ($\chi^2=13.34$, $df=1$, $P<.01$) 「幼稚園・保育所の送り迎え」 ($\chi^2=13.12$, $df=1$, $P<.01$) で増えていた。「入浴をさせる」「絵本を読む」「色々な事を教える」「衣服の着替えをする」「疑問に答える」では差がなかったが、「入浴させる」(K81.0%、F90.8%) 「教える」(K60.6%、F75.8%) 「疑問に答える」(K87.6%、F84.2%) では、10年目の父親も今の父親も、多くの人に参加していた。

母親の父親評価を見ると、Kでは「一緒に遊ぶ」($\chi^2=25.47, df=1, P<.01$)と「疑問に答える」($\chi^2=30.26, df=1, P<.01$)は低かったが、「おむつを交換する」($\chi^2=11.51, df=1, P<.01$)「食事(授乳)をする」($\chi^2=15.64, df=1, P<.01$)「寝かしつける」($\chi^2=23.73, df=1, P<.01$)「ぐずった時世話をする」($\chi^2=70.53, df=1, P<.01$)「絵本を読む」($\chi^2=20.42, df=1, P<.01$)「色々教える」($\chi^2=9.33, df=1, P<.01$)で父親より高く評価していた。また、Fでは、「絵本を読む」「色々な事を教える」のほかはすべて母親評価の方が低かった(「入浴させる」; $\chi^2=4.97, df=1, P<.05$)、「おむつを交換する」; $\chi^2=15.21, df=1, P<.01$ 、「着替えをさせる」; $\chi^2=23.05, df=1, P<.01$ 、「寝かしつける」; $\chi^2=3.95, df=1, P<.05$)、「ぐずった時世話をする」; $\chi^2=11.09, df=1, P<.01$)「一緒に遊ぶ」; $\chi^2=7.00, df=1, P<.01$ 、「疑問に答える」; $\chi^2=11.51, df=1, P<.01$)。育児に参加する理由としては、「子どもは夫婦で育てるのが一番良いと思うから」がK、F共に最も多く、次いで、「子どものことを(妻)に任せにはいけないと思うから」「自分自身が成長するから」が多かった。また、育児ができない(しない)理由としては、「仕事が忙しくて時間がない」がK、F共に最も多かった。

3) 育児における役割・分担

「両親の役割だと思うので、役割を分担している」がK(52.5%)、F(65.4%)共にもっとも多く、次いでFでは「自分の役割だと思うのですんで育児をする」(17.6%)、Kでは「母親の役割だと思うが頼まれれば進んでする」(14.8%)であった。「頼まれればしぶしぶ手伝う」「母親の役割だと思うので育児はしない」は、Fで選択した父親はいなかった。「育児休暇が取れるものなら取ろうと思うか」では有意差は見られなかった。

4) 子どもと関わる時間

平日の平均時間は、父親ではK4.0時間、F3.2時間、母親はK3.8時間、F2.9時間で、いずれも10年前より減っていた(父: $t=2.59, df=240, P<.01$ 、母: $t=3.21, df=235, P<.01$)。休日も、父親はK12.6時間、F10.6時間、母親はK12.6時間、F11.0時間で、有意に減少していた(父: $t=3.01, df=238, P<.001$ 、母: $t=2.22, df=235, P<.05$)。

(4) 父親の自己評価と母親の父親の評価

表4-1は、父親としての自己評価と母親の父親評価の結果である。また、表4-2は、夫としての自己評価と妻からの夫評価の結果である。K・Fともに、父親の役割及び夫の役割の自己評価は「十分果たしている」「まあまあ果たしている」という人が多く、母親も同じように評価していた。統計的には、父親の自己評価に変化はなかったが、母親評価は、父親評価が10年前よりも高く($\chi^2=3.80, df=1, P<.05$)、夫の役割評価は低下していた($\chi^2=5.7, df=1, P<.05$)。

4. 考察

父親の家事・育児に対する意識は、2000年から2011年の間に大きく変化していた。

「家事・育児は女性の役割」「父親(男性・夫)が家事の協力は当然」「父親の育児は当然」「男は仕事、女は家庭」等、育児における従来の考え方に対する項目で「思う」「思わない」が有意に逆転していた。2000年も2011年も、家事・育児参画に対する父親の自己評価も高く、

表 4-1 父親としての役割遂行度の自己評価

| | 項 目 | 父親 (夫) | | 母親 (妻) | |
|---|------------|--------|----|--------|----|
| | | K | F | K | F |
| 1 | 十分果たしている | 16 | 10 | 56 | 44 |
| 2 | まあまあ果たしている | 88 | 62 | 62 | 52 |
| 3 | あまり果たしていない | 23 | 26 | 15 | 6 |
| 4 | 全く果たしていない | 2 | 1 | 0 | 2 |

表 4-2 夫としての役割遂行度の自己評価

| | 項 目 | 父親 (夫) | | 母親 (妻) | |
|---|------------|--------|----|--------|----|
| | | K | F | K | F |
| 1 | 十分果たしている | 15 | 11 | 49 | 40 |
| 2 | まあまあ果たしている | 79 | 61 | 66 | 50 |
| 3 | あまり果たしていない | 30 | 28 | 15 | 10 |
| 4 | 全く果たしていない | 2 | 1 | 0 | 3 |

母親も同じように評価していた。しかし、実際の行動場面では、2000年では、家事・育児ともに父親の自己評価による参画度は増えていたものの、母親の父親評価では、2000年には父親より高かったものが、2011年には低くなっていた。父親の育児への参画の必要性が求められる動きのなかで、母親の欲求水準が高くなったのかもしれないが、母親の就労状況を見ると、2011年前ではかなり増加しており、しかも常勤職についている。そうした母親の生活の変化が影響しているのではないかと推察される。

一方、父親の方は、労働時間が2000年と2011年ではほとんど変化しておらず、子どもと過ごす時間が母親も父親もともに減少していた。そうしたなかで、母親の時間の無さが父親への要求水準を高くし、父親も時間の余裕がない中で、家事・育児を進んでしようとしていることが、父親の自己評価の高さと母親の父親評価の低下に反映しているのかもしれない。2000年代は、「育児しない男性を父親とは言わない」というキャッチフレーズによって、育児する父親への転換が始まった時期であり、それまで家事や育児にあまり関与しなかった父親が参画するようになるという変容が、母親のポジティブな評価を生み出したとも考えられる。あるいは、父親の忙しが増し（有意差はないが、2011年の方が労働時間が増えている）、現実に低下している可能性もある。今後、さらに検討する必要があるだろう。

本研究の単純集計結果では、「ときどき」と回答した人が多く、分析に際してポジティブ・ネガティブ反応で処理した限界もあり、この結果が妥当性の高いものであるかどうか、継続的な調査をしていく必要である。

研究Ⅱ

1. 研究Ⅱの目的

研究Ⅰでは、2000年と2011年のデータ比較を行ったが、その結果、父親の育児に関連する意識と実際の育児への参加行動は大きく変化していた。しかし、そうした量的な変化は、必ずしも質の変化を意味しない。本質的な変化をどうとらえるかが、重要な問題である。それは、育児する父親のモデルがなく、社会的にも育児する父親をしにくい日本の社会にあって、今後、父親の育児への参画がどのような方向性に向かっていくのか、また、これからの父親像や(父)親としての養育性・役割、父子関係を構築していくのか、それらの視点を見出すためにも、父親自身の特性や人間関係の中での変容を検討していく必要がある。ワークライフバランスなどの父親の育児生活環境の調整だけでなく、関係の質を捉えていかなければならない。

これまでの研究では、父親の就労状況や妻の就労時間、夫婦関係、末子年齢等が関係することが指摘され、父親の資質や特性との関連では、育児参画の多い父親は、自らの父親が暖かく養護的であること(Sagi, A., 1982)や、父親自身の幼少期の体験や自分の父親の存在、自分の父親との関わりの経験が育児行動に影響し、自分の子どもとの関わりの頻度と関連している(田辺, 2010)という研究結果が示されている。

そこで、研究Ⅱでは、父親の成育歴と愛着特性に注目し、今日の父親の育児に関連する家事、育児参画行動との関連を明らかにすることを目的とした。さらには、それらの結果を踏まえて、これからの父親の養育性・親役割を形成するための視点について一考することとした。

2. 方法

対象は、2011年の調査に参加した父親107名である。調査の実施の手続きは、研究Ⅰと同じである。父親の背景を探るために、2011年に行ったアンケートには、父親の成育歴と父親自身に関する項目を付加して調査を実施した。

父親の成育歴に関する項目は、父親自身の親の養育について、辻岡・山本(1978)らによる親の養育態度参考に「成育経験」項目として27項目を作成した。また、父親自身については、詫磨・戸田(1986)による成人用愛着尺度項目と不安傾向診断検査(GAT)の項目をもとに、父親の「不安・愛着」項目として30項目を作成した。

3. 結果

(1) 成育経験と愛着・不安傾向因子分析結果

父親の成育経験の27項目と不安・愛着の30項目に因子分析(重みなし最小二乗法・プロマックス回転)を実施した。表5、表6はその結果を示したものである。

「成育経験」項目からは、5つの因子が抽出された。第一因子は親のネガティブな養育態度に関する内容であることから「拒否性」と命名した。第二因子は、親や家族との親密さに関する内容であることから「親和性」と命名した。第三因子は、親の干渉的、過保護的態度に関する内容であることから「高圧性」と命名した。第四因子は、父親との関係に関する内容

表5 父親の「成育経験」項目の因子分析結果
(重みなしの最小二乗法・プロマックス回転)

| 因子名 | NO | 項 目 | 因子 | | | | | 共通性 |
|-----------|----|----------------------------------|--------------|-------------|-------------|--------------|-------------|------|
| | | | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 | |
| 拒否性 | 22 | 親は、私に対して拒否的だった | .892 | -.009 | .050 | .095 | .055 | .206 |
| | 20 | 私は、親から無視された | .800 | .171 | -.002 | -.080 | .053 | .277 |
| | 21 | 親は、私のことを理解してくれなかった | .701 | -.036 | .100 | .089 | -.020 | .459 |
| | 17 | 子どもの頃、母親の存在が薄かった | .484 | -.180 | -.195 | -.079 | -.105 | .479 |
| | 8 | 親から愛されて育った | -.376 | .249 | -.019 | .242 | .036 | .32 |
| 親和性 | 11 | 母親と相性がよかった | .057 | .841 | -.117 | -.150 | -.039 | .595 |
| | 27 | 子どもの頃、親を大好きだった | .048 | .747 | .047 | .197 | .033 | .481 |
| | 18 | 親は、いつもやさしく接してくれた | -.048 | .729 | -.128 | -.185 | -.018 | .289 |
| | 26 | 子どもの頃、家族団らんの時間があって、楽しかった | .051 | .519 | .091 | .414 | -.052 | .416 |
| 高圧性 | 12 | 親は、何かと私の行動を制限した | -.125 | -.190 | .691 | -.057 | -.111 | .474 |
| | 23 | 親は、私に干渉した | .157 | .063 | .636 | -.041 | -.084 | .450 |
| | 19 | 親は、私に干渉した | -.001 | -.317 | .537 | -.020 | .065 | .375 |
| | 4 | 親は、私に干渉した | -.019 | .059 | .488 | .092 | .161 | .499 |
| | 24 | 親は、私に対して過保護だった | .001 | .204 | .388 | -.026 | -.371 | .426 |
| | 13 | 親の顔色を見ながら育った | .028 | -.066 | .371 | -.070 | .057 | .578 |
| 父親との良好な関係 | 15 | 子どもの頃、父親の存在が薄かった | .058 | .212 | .041 | -.734 | -.037 | .541 |
| | 7 | 父親と相性がよかった | .118 | .053 | -.022 | .685 | .008 | .786 |
| | 3 | 父も母も忙しく、かまってもらえなかった | .193 | -.020 | .034 | -.325 | .052 | .502 |
| 熱中経験 | 14 | 子どもの頃、自分の好きなことをやり始めるとのめり込むタイプだった | .076 | -.129 | -.005 | .116 | .639 | .282 |
| | 9 | 中学・高校時代に熱中したこと（もの）がある | .022 | -.006 | -.089 | .002 | .567 | .613 |
| | 16 | 中学・高校時代に、時間を忘れて友達としゃべったものだった | -.098 | .274 | .206 | -.211 | .535 | .696 |

であることから「父親との良好な関係」と命名した。第五因子は、子どもの頃の人やモノとの親密な関係に関する内容であることから「熱中経験」と命名した。

また、「不安・愛着」項目からは2つの因子が抽出された。第一因子は、人との親密な関係に関する内容であることから「親密傾向・受容的愛着」と命名した。第二因子は、心気傾向や人への拒否的な態度に関する内容であることから「不安傾向・回避的愛着」と命名した。

表6 父親の「不安・愛着」項目の因子分析結果
(重みなしの最小二乗法・プロマックス回転)

| 因子名 | NO | 項 目 | 因子 | | 共通性 |
|-----|----|--|--------------|-------------|------|
| | | | S1 | S2 | |
| 親密性 | 17 | 私は、人付き合いが良い方だ | .820 | .102 | .356 |
| | 9 | 私は、人に好かれやすい性質だ | .796 | .069 | .408 |
| | 4 | 私は、割りとたやすく人と親しくなる方だ | .779 | -.068 | .640 |
| | 18 | 私は、たいていの人、私を好いていてくれると思う | .711 | .080 | .226 |
| | 11 | 私は、気軽に人に頼ったり頼られたりすることができる方だ | .612 | -.134 | .608 |
| | 24 | 私は、あまり人と親しくなるのは好きではない | -.483 | .120 | .307 |
| | 6 | 私は、いつもだいたい幸せな気分で過ごしている | .476 | .000 | .438 |
| 回避性 | 28 | 私は、気分がよくないと気難しくなる | .157 | .832 | .637 |
| | 3 | 私は、人にあまりにも親しくされたり、こちらから望む以上に親しくなることを求められたりするとイライラすることがある | .099 | .658 | .481 |
| | 30 | 私は、ひどく疲れやすい | -.101 | .657 | .279 |
| | 27 | 私は、いつも理由なくイライラしている | .024 | .632 | .392 |
| | 2 | 私は、体調がよくないと感じることもある | -.170 | .527 | .644 |
| | 10 | 私は、人に頼るのは好きではない | -.248 | .433 | .478 |

(2) 「成育経験」因子・「不安・愛着」因子と育児に関連する「家事参画行動」との関連

本調査では、育児とそれに関連する家事について、5段階評定で回答を求めた。そこで、各項目における選択数値を各項目の得点とし、「成育経験」因子・「不安・愛着」因子との関連を見るために、ピアソンの相関関係を求めた。図1は、その結果を示したものである。

育児に関連する家事参画と父親の「成育経験」因子との関連は、「父親との良好な関係」において、「洗濯物の取り入れ」($r=.209$)、「食事の後片付け」($r=.217$)、との間に正の相関が認められた。また、「親和性」において、「掃除」($r=.196$)、「洗濯物の取り入れ」(.246)、「ゴミ出し」(.242)、「買い物」($r=.272$)、との間に正の相関が認められた。

一方、父親の「不安・愛着」因子においては、「不安傾向・回避的愛着」と「洗濯物の取り入れ」($r=.262$)との間で負の相関がみられた。

(3) 「成育経験」因子・「不安・愛着」因子と育児参画行動との関連

育児参画行動との関連については、父親の「成育経験」因子における「親和性」と「入浴させる」($r=.342$)、「食事(授乳)させる」($r=.227$)、「着替えをさせる」($r=.292$)、との間に正の相関が認められた。また、「父親との良好な関係」と「授乳・食事をさせる」($r=.282$)、

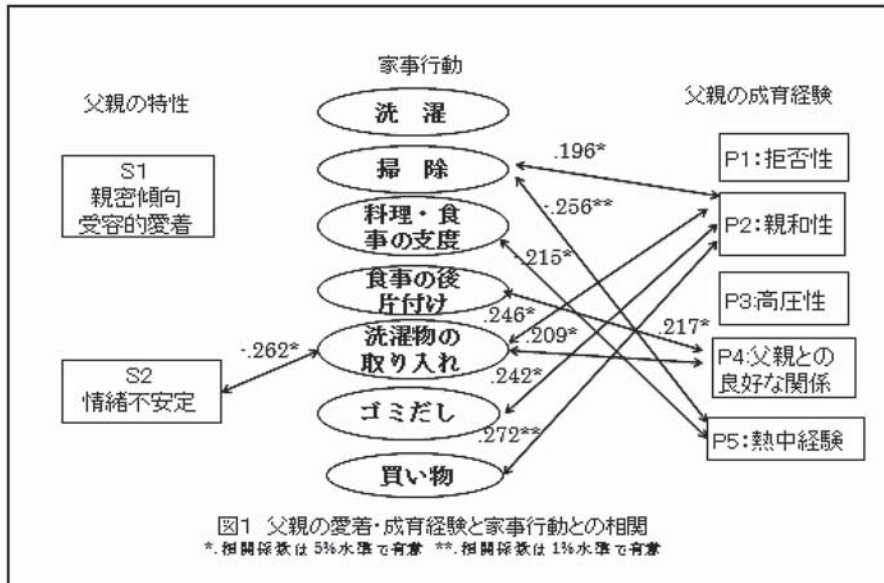


図1 父親の愛着・成育経験と家事行動との相関

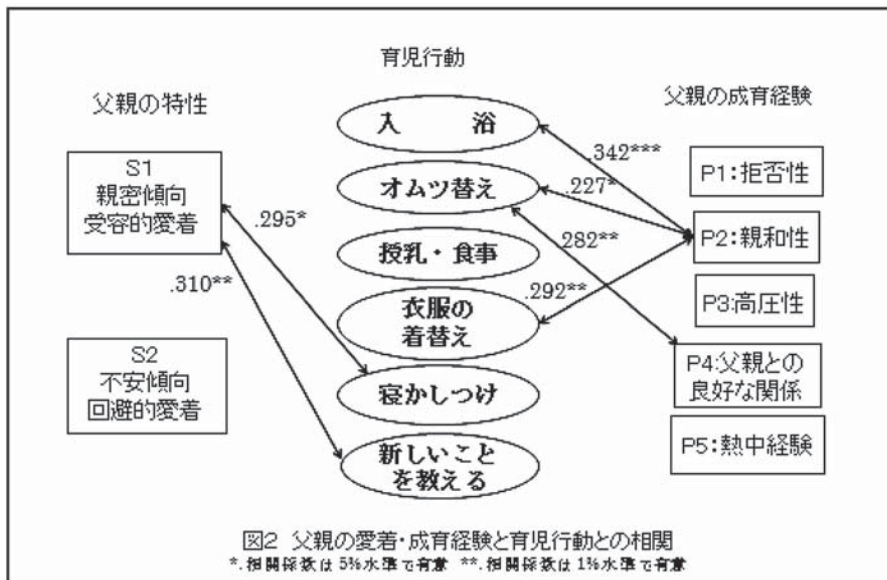


図2 父親の愛着・成育経験と育児行動との相関

との間に正の相関が認められた。一方、「不安・愛着」因子においては、「親密傾向・受容的愛着」と「寝かしつける」($r=.295$)、「新しいことを教える」($r=.318$)、との間に正の相関が認められた。

4. 考察

本研究の結果から、家事行動においては、「父親との良好な関係」が「洗濯物の取り入れ」や「食事の後片付け」と、また、自分の「親との親和性」が「掃除」「洗濯物の取り入れ」「ゴミ出し」「買い物」と相関していた。育児行動に関しては、「親との親和性」と「入浴させる」「食事(授乳)させる」「着替えをさせる」といった育児行動とに相関が見られた。また「父親との良好な関係」は「授乳・食事させる」に、「親密傾向・受容的愛着」は「寝かしつける」「新しいことを教える」といった育児行動と関連することが示された。

つまり、家事行動においても、育児行動においても、父親の成育過程における自分の親との親密な関係や自分の父親との良好な関係、さらには父親の他者との「親密傾向・受容的愛着」といった特性が影響していた。親和性が高く、自分の親と親密で良好な関係をもつ父親は、家事では、洗濯物の取り入れ、ゴミ出し、買い物といった物理的なハード面だけでなく、掃除、食事の後片付けなどの生活のソフト面のメンテナンスにも関与し、育児においても、入浴、授乳・食事、着替えといった子どもの生活とそのケアにも関与していた。また、子どもに色々と教える、寝かしつけるといった時間と忍耐を要するかかわりをしていた。

もう一つ注目すべき点は、「不安傾向・回避的愛着」が育児の全ての面に関連していない点である。「父親の親密傾向・受容的愛着」及び「不安傾向・回避的愛着」は、父親の自分の親による養育態度と関連するという、母子の愛着研究で明らかにされた事実が、父親においても示された。

総合考察と今後の課題

本研究から、父親の家事・育児に対する意識や行動は確かに変化してきていることが明らかにされた。しかし、父親の労働時間は変化しておらず、そうした中で、家事・育児に参画していく事は、実質的な時間の削減につながり、かかわりの質の低下とともに、父親のストレスを高める可能性がある。父親も母親も家事・育児の質的な充足のある絶対時間を確保するには、やはりワークライフバランスを考えることが喫緊の課題であろう。さらに、限られた時間の中で質の高い関わりを確保することと、父親が父としての子どもへの親和性や自律性を獲得していくことを考慮に入れた支援を考える必要がある。

しかし、それは、父親あるいは父子というように切り取った場面でとらえるのではなく、母親あるいは父親(ひとり親家庭であれば、その親を取り巻く周りの重要な他者)との相互関係を基軸にした関係構築という枠組みの中で考えていく重要性が、今回の研究結果から示唆される。本研究自体は、今の父親の変化とその背景を探るものであったが、その結果が示したことは、父子関係の世代間連鎖を予測させるものであり、母親の愛着の世代間伝達(数井・遠藤・田中・坂上・菅沼、2000)が明らかにされているように、父親の愛着の世代間伝達を

立証したといえるだろう。しかし、それはネガティブな意味を持つものではなく、父親を取り巻く人間関係の中で変容可能なものであり、そうした意味での新たな関係構築を図る支援が必要であろう。そして、さらに重要なことは、育児する父親像やその役割アイデンティティの文化的イメージが持ちにくい今の父親の奮闘状況は、その子どもたちが新たな父親像をインプットする機会になると考えられることである。いまの父に育てられている、次世代の親になるであろう子どもが、新たな父親像や親像を生成するモデルとなる。次世代へと繋がる世代間循環の一時期として今を捉え、これまでのイメージや関係性に回帰するのではなく、新たなイメージと関係を生成していくプロセスを重視する必要があると。

これからの父親支援は、そうした見通しのなかで、父親としての自律性や親性を獲得していく展開が求められよう。養育性とは、相手の心身の発達や状態の改善に必要な態度、知識と身体技術であり、子育てを通して獲得された成熟した人格の要素である（陳、2011）。父親の養育性の形成を促す発達環境の整備していく観点から、子どもの育ちの理解、子どもの生活する物理的・社会的環境、子育て習慣、育児に関する養育者としての知識や関わり方の技術、そして、時間的なゆとりのない父親の育児ストレスの軽減を図る支援のあり方をサポートシステムとして構築していく必要がある。そして、そう下中で、父親自身の親密性と周りとの安定した愛着関係を構築することが重要である。

謝辞：本研究の実施にあたり、アンケートにご協力くださった兵庫県伊丹市立保育所の保護者の皆様、所長先生はじめ担任の保育士の皆様に心よりお礼申し上げます。また、本研究の2000年データは2000年度神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科卒業生岸田陽子さんによって、2011年データは2011年度神戸松蔭女子学院大学人間科学部子ども発達学科卒業生藤本あゆみさんによって収集されました。ここに記してお礼申し上げます。

付記：本研究は、日本教育心理学会第55回大会（2013）。日本発達心理学会第26回大会（2014）において発表した内容を修正加筆したものである。

文献：

- Baumrind, D., & Black, E. 1967. Socialization practice associated with dimension of competence in preschool boys and girls. *Child Development*, 38, 291-327
- Belesky, J., Crnic, K. & Gable 1995. The determinants of co-parenting in families with toddler boys; Spousal differences and daily hassles. *Child Development*, 66, 629-642
- Chibucos, T.R. & Kail, P. R. 1981. Longitudinal examination of father-infant interaction and father-infant attachment. *Merrill-Palmer Quarterly*, 27, 81-96
- 陳省二 2011. 養育性と教育. 北海道大学大学院教育学研究院紀要. 113. 1-12
- Cox, M.J. & Owen, M.T., Henderson, V.K., & Margand, N.A. 1992.. Prediction of infant-farther and

- infant-mother attachment, *Developmental Psychology*, 3, 16-36
- Cohen, R.S. Cohler, B.J., & Wessmann, S. H. 1984. *Parenthood; A psychodynamic Perspective*. New York: The Guilford Press. Berman & Pedersen.
- Crokenberg, S. B. 1981. Infant irritability, mother responsiveness and social support influences on the security of infant-mother attachment. *Child Development*, 3 16-36
- Easterbrooks. M.A. & Goldberg, W.A. 1984. Toddler development in the family impact of father involvement and parenting characteristics. *Child Development*, 7. 323-326
- Engfer, A. 1988. Interrelatedness of marriage and the mother-child relationship In R. A. Hinde, & J.Stevenson-Hinde (Eds.). *Relationship within families; Mutual influences*. New York: Oxford University Press.104-118
- Grossmann, F.K., Pollack, W.S., & Goldind, E. 1988. Fathers & Children; Predicting the quality and quantity of Fathering. *Developmental Psychology*, 24 82-91
- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎 (1999) 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関係 発達心理学研究 10 189-198
- 原田悦子・落合幸子・長谷川寛子・岡島京子・渡辺弥生 1984. 父性意識の形成過程. 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 280
- 原孝成・江崎明子・弦卷千文・石橋英子・田嶋英子 1998 父親の養育態度が母親の満足度に及ぼす影響 日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 348
- 柏木恵子 1993. “父親の心理学”の社会文化的背景—家族・親役割、女性・母性の変貌—。柏木恵子編著 父親の心理学 - 父性の現在とその周辺—。川島書店 29-60
- 柏木恵子・若松素子 1994. 「親になる」ことによる人格の発達—生涯発達の視点からの親を研究する試み— 発達心理学研究. 5. 72-83
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 2000. 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究. 48 (3). 232-332
- 子ども未来財団 1998 子育てに関する意識調査事業調査報告書(概要版) 子ども未来財団
- Kotelchuk, 1976. The relationship to the father; Experimental Evidence. In M.E. Lam (Ed.), *The role of Father in child development*. New York;Wiley.
- 厚生労働省「イクメンプロジェクト」サイト <http://www.ikumen-project.jp>
- Lam, E. M. & Sagi, A. 1983. *Fatherhood and family policy*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Inc.
- Lieberman, M., Doyle, A.B., & Markiewicz, D. 1999. Developmental patterns in security of attachment

to mother and father in later childhood and early adolescence; Association with peer-relations. *Child Development*, 70, 202-213

牧野カツ子・中西雪夫 1985. 乳幼児を持つ母親の育児不安—父親の生活および意識との関係—家庭教育所研究紀要, 6, 11-24

Mash, E. J., Johnston, C., & Kovitz, K. 1983. A Comparison of the mother-child Interactions of physical abused and non-abused children during play and task situations. *Journal of Clinical Child Psychology*. 12, 337-346

松田茂樹 2006a. 男性の家事参加の変化—NFRJ98、03を用いた分析 西野理子・稲葉昭英・高崎尚子編「第二回家族についての全国調査(NFRJ03)第二次報告(NO.1)夫婦、世帯、ライフコース 日本家族社会学会・全国家族調査委員会, 35-48

松田茂樹 2006b. 近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化 季刊家計経済研究 71, 45-54

内閣府 2005. 国民生活白書

尾形和男・宮下一博・福田佳織 2003. 母親の養育行動に及ぼす要因の検討—父親の協力的関わりに基づく夫婦関係, 母親のストレスを中心にして— 千葉大学教育学部研究紀要, 50, 5-15

岡野雅子・佐藤睦江・依田多恵 2006. 父親の親性の発達—第一子の出生前後を中心に— 日本発達心理学会大 16 回大会発表論文集, 607

斧出節子 2003b. 家事・育児・仕事と夫婦関係 育児をめぐるジェンダー関係とネットワークに関する実証的研究—質的研究編 平成 13-14 年科学研究費補助金(基盤研究 C)(1) 研究成果報告書 59-70

小野寺敦子・青木紀久代・小川真弓 1998. 親になる意識の形成過程 発達心理学研究. 9. 121-130

Pedersen, F.A. & Robinson, K.S. 1969. Father Participation in infancy. *American Journal of orthopsychiatry*, 39. 466-472

Pedersen, F.A. 1980. *The father-infant relationships; Observational studies in the family setting*. New York Prager.

Robinson B.W., & Barrette R.L. 1986. *The Developing father-emerging role in contemporary society*. NewYork ; Guilford Press.

Sagi, A. 1982 Antecedents and consequences of various degrees of paternal involvement in child rearing: The Israeli project. In M.E.Lam (Ed.), *Nontraditional Families Parenting and Child Development*. L.E. A, pp.205-237.

- 鈴木清・辰野千寿・高野 清純・古屋健治・松原達哉 不安傾向診断検査手引書 (GAT) 日本文化科学社.
- 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる・田丸尚美・角本典子 1997. 埼玉県における子育ての実態と母親の育児ストレス—1歳児を保育園に預けて働く母親の場合—鳥取大学教育学部研究紀要報告, 39, 83-129
- 多賀太 2006. 仕事と育児のはざまで一性役割分業の揺らぎと父親の葛藤 男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース 世界思想社 127-130
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988. 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東京都立大学人文学報 . 196. 1-16
- 田辺昌吾 2010. 乳幼児を持つ父親の定位家族体験と現在の生活との関連—父親自身の父からの影響に焦点をあてて—. 日本保育学会大 63 回大会発表要旨集 . 474
- 辻岡美延・山本吉廣 1978. 親子関係の種類—親子関係診断尺度 EICA — 教育心理学研究 . 26-2, 84-93
- Zelazo P.R., Kotelchuk, M., Barber, L. & David, J. 1977. *Father and son; An Experimental facilitation of attachment behaviors*. Paper presentation at meeting of the Society in Child Development.

(受付日 : 2016. 12. 10)

